

まんぜ
万瀬遺跡(本発掘調査B)

所在地 北設楽郡設楽町川向字マンゼ
(北緯35度06分43秒 東経137度33分54秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和5年6月～8月

調査面積 500㎡

担当者 鬼頭 剛・川添和暁・荒木徳人



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業である。令和5年6月から8月にかけて実施した。

立地と環境 遺跡は豊川支流の一つである境川右岸に所在し、丘陵末端の緩斜面上に立地する。今年度の調査区は県道432号小松田口線道路直下の位置にあたり、調査面積は500㎡で設定された。調査区の調査前の標高は412～415mを測る。

調査の概要 調査は中世から近世の遺構を中心とする上面、縄文時代早期前半を中心とする下面の2面に分けて行われた。

中世以降 上面では中世から近世を中心とした遺構が調査区全体に展開しており、主な遺構として、土坑墓2基、鍛冶関連の遺構が挙げられる。

3115SZは調査区の東端に位置する楕円形の土坑墓で、人骨や煙管、鉄製品、灰釉摺絵鬘甕が出土した。一方、調査区の西端に位置する隅丸方形の土坑墓3018SZでは歯や人骨、副葬品として小玉、鉄製品、寛永通宝、煙管等が出土した。3115SZと3018SZから出土した骨はどちらも焼けていないことから土葬であったことがわかる。

調査区の東端に位置する平坦面からは鍛冶関連の資料がまとまって見つかった。3081SLは、焼土を多く含む地床炉と思われる遺構である。また、3074SKと3085SKからは鉄滓が、3004SKと3109SKからは多くの炭化物が出土しており、周囲にピットなどもあることから、この平坦面は鍛冶関連の活動を盛んに行った場であったと考えられる。

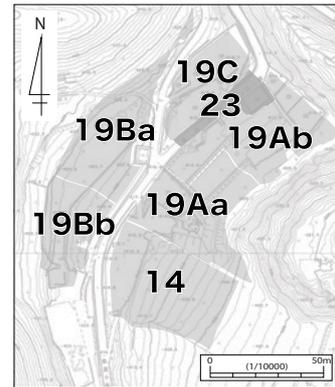
また、上面では調査区の東側から岩偶岩版類が出土した。形状は長円形、長さ4.3cm、厚さは2.2cmあり、中央に深く溝が1条、上部に6条の細い横線が刻まれている。岩偶岩版類は縄文時代のものであるが、恐らく、中世から近世の造成によって混在したと考えられる。

下面では縄文時代早期前半を主体とし、主な遺構として、竪穴建物跡や煙道付炉穴、遺物包含層が確認された。

縄文時代早期前半 19C区を調査した際に今年度の調査区である23区にまで範囲が及ぶ、竪穴建物跡が5棟重複した形で確認されていた。本調査では31171SI、3118SI、3135SI、31150SI、計4棟の竪穴建物跡が確認された。

3147SKの煙道付炉穴内には石器、押型文土器や撚糸文土器の土器片が形状がわかる状態で出土した。炉穴内の埋土は二層になっていることから、複数回にわたって何度も使用していたことが考えられる。

(荒木徳人)



調査区位置図



3018SZ 土坑墓 (南から)



3147SK 煙道付炉穴 1. 遺物の出土状況 (北から)

